

いじめ現象はどのように構成されるか

長谷川 裕*

はじめに

「いじめ」は、人が他の人を攻撃する、攻撃行動のひとつのタイプである。このタイプの攻撃行動の特徴のひとつは、それが、相互作用を及ぼし合う複数の者たちが集合的な衝動に駆られて特定の者に攻撃を集中する、ある種の集合行動である点にある。

一昨年来、このいじめの問題が再びクローズアップされている。前回いじめ問題がクローズアップされた1990年代半ばから後半にかけて、筆者はいじめについてのいくつかの論考（長谷川1996, 1998, 1999）を執筆した。そのうちのひとつ（長谷川1998）でも述べたことだが、上記のような集合的な攻撃行動であるいじめは、内藤（1996）の言葉を借りれば、人類にとって宿痾とでもいえる普遍的な、群であることの「いきがたさ」を、特殊な形で映し出す現象である。いじめという現象に焦点を当てることを通じて、人が群をなす、集団を形成することに本質的に絡みつく問題性を照射することができるのではないか。そういう意味でいじめは、それがとりわけ問題となる教育領域の実践や研究にとってだけでなく、人間の心理や社会関係についての原理的な究明作業にとっても、重要なトピックのひとつであると、筆者は思う。

筆者は上記のいくつかの論考の中でも、いじめに対してそうした関心を向けてきた。本稿も同様の関心に立ち、集合的な攻撃行動であるいじめとはいかなる現象であるのかを精確に掴み描くべく、いじめ現象を構成する諸ファクターを整理するという作業を行ってみたい¹⁾。

いじめ現象を構成する諸ファクター

いじめ現象を構成する諸ファクターとして、どのような視座から何を取り上げ何を取り上げないかは、一義的に決まることではない。例えば、N・ルーマン流の社会システム理論の視座

* 琉球大学 教育学部 社会科教育講座

(ルーマン 1984 =1993,1995 など参照) に立つならば、いじめはひとつの「相互行為システム」である、ということになるだろう。したがって、この視座に厳密に沿うならば、いじめという相互行為システムを構成するファクターとは、このシステムの要素である「コミュニケーション」である、つまり、誰かが他の誰か(Xとする)のことを「うざい」と言い、それを聞いた周囲の者もその言葉に同調し、共謀して翌日からXのことを無視することを決め、実際に決めたとおり無視を始め、Xは「何で無視するんだ？」と尋ねるが、共謀者たちは時々ニヤニヤするだけで一切口を聞かない、などというような相互行為の展開の各单位である、ということになるだろう。

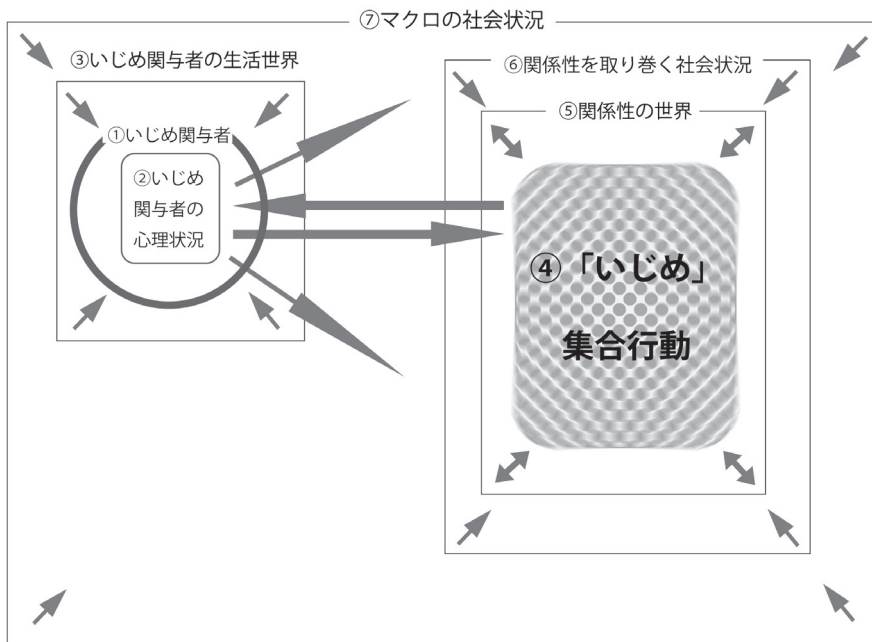
しかし、いじめ現象を構成する諸ファクターをこのような範囲で考えると、それらに着目して得られるのは、どのような要素的なコミュニケーションがどのように継起することによって、いじめと呼ばれる相互行為システムが展開していくかについての詳細な描写ということにとどまるだろう。もちろんそれはそれで意味のあることだが、それだけでは、なぜいじめという相互行為システムが発生するのか、いったん発生したこの相互行為システムをそのシステムの外からどのように統御することができるのか、などについて十分には考えづらい。

そこで以下では、社会システム論など、ある特定の社会理論の視座に立った厳密な用法というのではなく、上記のようないじめの発生機序やその統御を考える上で何に着目することが必要かという観点に立って、その着目が必要だと思われる諸ファクターを一括して「いじめ現象を構成する諸ファクター」と呼ぶことにしたい。それら諸ファクターとその関係を図示したのが、次の図である。そこには、人間の心理からマクロな社会システムまで、社会的な事象の多様なレベルが混在して描かれている。以下、この図に示されている諸ファクターひとつひとつについて説明しながら、いじめ現象がどのように構成されるかを論じていきたい。

(1) いじめ関与者

- i. いじめという集合行動が発生し展開していくには、いうまでもなくそれに関与する人間主体が必要である。だが、以下の議論からわかるように、いじめの発生・展開に関わるファクターは多様であり、したがってそこに何らかの形で関与する人間というものも様々存在している。しかし、それらすべてを考慮に入れることは不可能であるし、それらすべてがあるいじめの発生・展開に対して均等なウェイトで関与していると想定することは、いじめ現象を捉える上で無意味である。文字通り「いじめ関与者」として特定すべき一定範囲を限定する必要がある。が、その限定がどのように行われるかは、一義的に決まるものではない。

ただ、森田他(1994)の議論は、この点についてのひとつの有力な見方を示していると言っていいだろう。森田他(1994)によれば、いじめが生じている集団には、「加害者」(いじめ行動の直接の担い手である「いじめっ子」)、「被害者」(いじめのターゲット



となる「いじめられっ子」), 「観衆」(「いじめをはやし立てたりおもしろがってみている」者), 「傍観者」(「見て見ぬふりをしている」者) という4種のいじめ関与者がいて, 彼/彼女らの「四層構造」が形成されるという。この構造を構成するこれら4種類の関与者のうち, 加害者・被害者はもちろんのこと, 観衆・傍観者もいじめの成立にとって独自の重要な役割を果たす, というのである。妥当な認識であると考え, 筆者もおおよそこれらの者たちのことを「いじめ関与者」として想定している。

- ii. 以下で述べる各ファクターは, ごく大まかに考えても, いじめ関与者のこれら4類型各々によって異なる内容となってくるはずである。しかし実際には以下は, 主に「加害者」(場合によっては「観衆」も含む) のことを念頭においた記述となっている。その点, 了解いただきたい。

(2) いじめ関与者の心理状況

- i. いじめ関与者のうち特に「加害者」(場合によっては「観衆」も含む) について言えば, いじめという行動を行う場合, 彼/彼女らは, それに先だってその動機となりうる何らかの心理状況のうちにあると言えるだろう。内藤(2001)²⁾の場合, いじめの動機となる心理状況に関して, 次のように論じている。すなわち, 無力な状態で痛めつけられ続

けること、逃げることのできない拘束下におかれることなどがきっかけ要因となって、人は、“自分には今これが欠けているのだ”という明瞭な像を結べない、「何が問題でどうしたら充足できるかが把握できない」、「いいようのない」感覚に陥ることがある。それは、当人にとっては「慢性的で漠然としたイラダチ・ムカツキ・空虚感」といった感覚として体験されるもので、〈欠如〉と名づけることができる。人はそうした〈欠如〉状態にあると、それとは逆の状態を漠然と希求し、その逆の状態であればきっとこんな感覚を抱くであろうとある感覚を夢想し、その感覚を得るための行動に駆り立てられる。その感覚を「全能感」と呼ぶことができる。こうした〈欠如〉→「全能感」希求という心理過程が、いじめの動機となっているのである、と。筆者もまた、おおよそこのような心理状況がいじめという行動の動機となっていると考える。

- ii. こうした心理状況は、確かにいじめの動機となるが、しかし一義的にいじめ行動の実行にのみつながるわけではなく、それ以外の行動へとつながる場合もある（図中で「②いじめ関与者の心理状況」の図形から出ている斜め上下向きの矢印は、そのことを示している）。つまり、いじめが発生するかどうかは、そこに関与する人間の心理状況によってのみ決まることではない、ということである。

(3) いじめ関与者の生活世界

- i. (2) で述べた、いじめの動機となる心理状況は、言うまでもなく、そのいじめ関与者が生きる生活世界の中で形成されるものである（「③いじめ関与者の生活世界」の図形の4つの頂点から「②いじめ関与者の心理状況」の方向に向かう4つの矢印は、そのことを示している）。(2)i. で触れた内藤（2001）の議論の場合、人のうちに〈欠如〉状態を発生させる、「無力な状態で痛めつけられ続け」たり「逃げることのできない拘束下におかれ」たりするようなその人の生活世界がこれに当たる、ということになるだろう。

(4) 「いじめ」集合行動

- i. (1) で見た4タイプのいじめ関与者のうち、「加害者」がある者をターゲットにして悪口を言ったり無視をしたり暴力を振るったりし、「被害者」がそれに対して何らかの反応をし、「観衆」が両者のそうしたやりとりをおもしろがって眺め、「傍観者」は何ごともし起きていないかのように知らないふりを決め込む、こうした各関与者の行為の相互連関とその展開が、いじめという集合行動である。
- ii. 本稿冒頭でも述べたように、そうしたいじめ集合行動は、人間が行う様々な攻撃行動のうちの、ある独自な特徴を帯びたタイプのものである。では、その独自な特徴とは何か。

どういふ特徴を帯びたものであれば「いじめ」と呼べるのか、あるいは呼べないのか。

これは要するに、「いじめとは何か」という問いである。この問いに対するひとつの答え方は、いじめという概念の定義を行うことである。この場合の定義とは、これから丹念な分析を行っていくのに先立って、差しあたりその分析を加えるべき対象の範囲を確定するための定義である。こうした意味での定義は、いじめと見なされる現象を観察してこの現象に関する観察可能なデータを収集し、それらからわかるこの現象の観察可能な諸特徴をもとに行われる。つまり、それら諸特徴のうち、この現象とそうでないものとを区別するのに必要十分なものによって構成される、この現象についての記述——これがここでいういじめの定義である³⁾。筆者自身は、このような意味でのいじめ概念の定義を、特に菅野（1986）に依拠して、「1）同一集団の成員の間で、2）多数の成員によって少数の成員に対して、3）集団の名のもとに行われる集合行動として、4）反復的になされる、5）差別⁴⁾の行為である」とするのが適当であると考えている。

- iii. 「いじめとは何か」という問いに対する答え方は、以上のようないじめ概念の定義を行うこと以外に、また別の答え方をすることも可能である。それは、上記の定義によってその範囲を確定された対象に対して様々な分析を加えていき、それらの分析の成果の集約として下す、「いじめとは何か」に対する答えである。筆者は、長谷川（1998, 1999）にて、その分析成果の集約に当たるものを「本質的性格」と名づけた。それは、いじめの諸特徴の中核にあって他の諸特徴がそこから派生してくるような特徴である。その特徴は、もはや直接観察可能なものではなく、理論的な分析の結論として浮かび上がってくるようなものである。筆者が長谷川（1998, 1999）で示したいじめの本質的性格は、それが、相互に欲望する対象を模倣し合う（＝「模倣欲望」を抱く）「分身」同士と化した者たちが、互いの間の「相互暴力」の沸騰の危機を回避すべく、「全員一致」である唯一の「スケープゴート」に向かってその暴力を集中させる、「供犠」現象——ただし今日では、近代社会における競争関係の深化ゆえ、本来の供犠とは違って模倣欲望・相互暴力を十分に冷却し切ることのできない「擬似」供犠現象——である、ということである⁵⁾。
- iv. (2)i. で見たように、いじめ関与者は、いじめを行う動機となる何らかの心理状況のうちにある、その心理状況に動機づけられていじめという行動を行う。図中で「②いじめ関与者の心理状況」と「④「いじめ」集合行動」とを結ぶ2本の太い矢印のうち右向きの方は、そのことを示している。左向きの矢印は、いじめが行われることによってその関与者のもとに何らかの心理状況がもたらされることを示している。後者に関して、内藤（2001）に基づけば、いじめの動機となる「全能感」希求は、漠然とした〈欠如〉感覚が反転したものであるがゆえ、決して真に充足されることはない、ということになる。つまり、いじめ行動によってでは、それをもたらず鬱屈した〈欠如〉状態は解消されることがないのである。にもかかわらず、いったんこの感覚に陥ってしまえば、人は

しばしば、それを充たそうとする行動に嗜癖的に駆り立てられることになる。それが、同一のターゲットに対して、あるいはターゲットを換えて、いじめ行動が反復されるゆえんである。

- v. 「②いじめ関与者の心理状況」と「④「いじめ」集合行動」との関係について、もう少し述べておきたい。中学生から大学生までの若者による（司会は教員）いじめをめぐるある座談会（宮崎他 2007）の中で、ある人をターゲットにいじめが発生する際、その人が「『きらい』という感情がクラス全体に広がって」いくこと、そこには「そのかたまりに合わせていったほうがなんというかラク」と思い「その流れと一緒についていく」という心理が作用しそれがクラスの中に「伝染していく」ことが語られている。このように、いじめは、その発生や展開において、そのターゲットに対する嫌悪感などを伝播させつつ、いじめに加担する動機を当初は格別もっていなかった者までをも巻き込んでいくという特徴がある。森田他（1994）でも、いじめは、「集団の雰囲気や集団圧力にのまれて」そこに加担する者を生み出しつつ展開していく、まさに「集合行動」であることが指摘されている。もちろん、ある「心理状況」（例えば、(2) で見た〈欠如〉状態）に元々ある者のほうがそうでない者に比べて、そうした同調性を示しやすいということもあるだろう。しかしそれ以上に重要なのは、次の「⑤関係性の世界」の性格のいかんである。つまり、こうした感情の同調性をもたらしやすい「関係性の世界」かそうでないか、ということである。

(5) 関係性の世界

- i. これが意味しているのは、いじめ関与者たち（この場合は、「加害者」「観衆」だけでなく「被害者」「傍観者」を含む）が作り上げるミクロな関係性の世界であり、いじめという現象が発生する直接的な舞台である。本稿がいじめ現象を構成する諸ファクターとして、この「関係性の世界」というファクターを取り立てて挙げるのは、いじめとは何よりもこの関係性という次元のできごとであり、関係性のあるあり方がいじめ現象の発生の蓋然性を高めたり低めたりするのであり、いじめという集合行動とはそうしたある関係性のあり方の表れのひとつである、と筆者が考えるからである。
- ii. では、子どもたち同士等々の関係性がどのようなあり方をする場合に、いじめを発生させやすいのか。(4)iii. で述べたように、筆者はいじめを、相互に「模倣欲望」を抱く「分身」同士と化した者たちの行う「供犠」現象であることをその本質的性格としている、と考えている。この考えに基づくならば、互いの中で、例えば身分や能力の点での歴然とした差異を認めず、そうした越えがたい差異があるとは見ないゆえにかえって（かといって、お互いを尊重し合う平等な関係性を築き維持しようとするのではなく）、

互いに相手よりも上のポジションに位置したいと欲望する「分身」同士の関係性がある時、供犠としてのいじめが発生しやすい、ということになるだろう。いじめの重要な動機となる〈欠如〉状態にある者は、「関係性の世界」においては、注5)の内藤(1996)についての記述にあるように、「パワー」あるいは「完全なコントロール」を主題とするタイプの「筋書」の「具現」によって「全能感」を得ようとし、それがいじめ行動となって表れるわけだが、そうした事態が発生しやすいのは、その関係性が他者よりも上に立って支配するポジションにつくか否かということが焦点化されやすい「分身」同士の関係性である場合である。

- iii. 学校に通う子どもたちにとってこの「関係性の世界」とは、何よりも、彼/彼女らが学級・部活動などへの所属を介して取り結ぶ子どもたち同士の関係性の世界である。しばしば子どもたちはその世界を、自分たちの自律的な世界であると見なし、その構成員以外の介入を嫌う。それは、その世界に発生しているいじめについても当てはまる。いじめを行う者はしばしば、いじめられている者がそのことを教師など大人たちに告げること「チクリ」という言葉を使って非難し制止しようとする。いじめを行う自分たちの非は意識されず、むしろ子どもの世界のことを大人に漏らす「チクリ」の行為の方が卑怯だと、半ば本気で思っている。いじめられている者はしばしばその制止に服してしまうが、それは、「チクリ」ことに対して後でいじめる側から報復がされることをいじめられている者が恐れるからでもあるが、同時に、いじめられている者もいじめる側と同様に、いじめ—いじめられの問題は自分たちの世界の問題であり大人に漏らすのは卑怯なことだと、自分自身で思い込んでしまっているからでもある。こうした事情もあって、教師・大人にとって、子どもたちの間のいじめの発見はそう容易ではないことが通常である。
- iv. (2)で見たいじめの動機となる心理状況は、この「関係性の世界」の中で形成される場合が多い。つまり、その心理状況を生み出すものを示している、図中の「③いじめ関与者の生活世界」は、実際には「⑤関係性の世界」である場合が多いということである。図中で両者を分けて描いているのは、諸ファクターの関連を平面に図示する便宜上の理由からであり、図の左の方ではいじめ関与者のもとにいじめ行動への動機が形成される局面のことを、右の方ではいじめという現象が発生・展開していく場のことを示そうと考えたからである。
- v. 「関係性の世界」は、そこにいじめが発生することによって、そのあり方に反作用を受け何らかの変化をもたらされるものである。例えば、いじめのターゲットが固定せず短期的に移動していくようなタイプのいじめが発生した場合特に、次のターゲットが自分に廻ってこないように、自分の言動に対して他者が抱く印象に絶えず気遣わなければならない、緊張感に満ちた関係性になる(あるいは、その程度が増す)だろう。そうした緊張感はその関係性の中にある者たちに〈欠如〉状態をもたらし、そのことが再びその

者たちをいじめ行動へと駆り立てることにもなる。「⑤関係性の世界」の図形の4つの頂点から「④「いじめ」集合行動」の方向に向かう4つの矢印が両向きであるのは、このようにいじめの側から関係性の世界への反作用があることを示している。

(6) 関係性を取り巻く社会状況

- i. これは、「⑤関係性の世界」を取り巻くメゾ・レベルの社会状況である。そのあり方が、「⑤関係性の世界」がどのような性質のものであるかを規定し、その世界がいじめの発生しやすいものとなるか、あるいは発生しにくいものになるかを左右する。
- ii. 学校に通う子どもたちにとってこの「関係性を取り巻く社会状況」とは、何よりも、学校・学級という制度の有り様である。(5)で述べたように、いじめとはその本質的性格として、相互に「模倣欲望」を抱く「分身」同士と化した者たちの行う「供犠」現象であると考え、人々の間に「分身」同士の関係性があるとき供犠としてのいじめが発生しやすいとするならば、学校・学級はそうしたタイプの関係性の形成にどのように与っているのか。この点について筆者は、長谷川(1998, 1999)においておおよそ次のように述べた。今日の学校・学級の制度は、子どもたちを十分に凝集させる論理が存在しない、その凝集性がかなり弛緩した制度となっている。つまり、現代の子どもたちは、はっきりとした目的意識ももてぬままに、学校・学級の制度の下に押しこめられている。そのように学校・学級に対するアイデンティティの不定状態にある彼/彼女らは、その場の仲間同士の間で自分の位置を確認することに強く囚われる。その囚われは、互いの間の「模倣欲望」が加熱していくこと、そのことによって「相互暴力」の暴発の危険性が充満していくことをも意味している。そうした緊張の高まりが、いじめという特定少数の者をいたぶる楽しみを通じて逸らされているのである、と。

(7) マクロな社会状況

- i. これは、「③いじめ関与者の生活世界」や「⑤関係性の世界」「⑥関係性を取り巻く社会状況」の背景にある、よりマクロな社会状況である。マクロな社会状況は、「③いじめ関与者の生活世界」のあり方を規定し、そのことを介して「②いじめ関与者の心理状況」のあり方に影響を及ぼす。また、「⑥関係性を取り巻く社会状況」のあり方を規定し、そのことを介して「⑤関係性の世界」のあり方に影響を及ぼす。そして、前者ではいじめ行動へと駆り立てられやすい動機をもった者たちを生み出したり生み出さなかったり、後者ではいじめが発生しやすい関係性のあり方を生み出したり生み出さなかったりすることになる。

- ii. 図では、「⑤関係性の世界」に対しては殊に「⑥関係性を取り巻く社会状況」なるものを想定しているにもかかわらず、「③いじめ関与者の生活世界」に対しては同様のものを想定せず「⑦マクロな社会状況」に直接に取り囲まれるような描き方になっている。これは、(5)(6)を通じて述べたように、まずいじめとは何よりも「関係性の世界」のできごとであり、さらにその関係性のあり方は、それが生起する舞台である制度の有り様（すなわち、「関係性を取り巻く社会状況」）によって強く規定されると、筆者が考えているからである。つまり、(6)で触れたように学校・学級であれば、その制度の有り様がどのようなものであるかによって、いじめが発生しやすい関係性のあり方が生じたり生じなかったりする、この点を強調したいからである。
- iii. ここで「マクロな社会状況」といっているものは、いくつものレベルにわたる。例えば、ある学校で起きているあるいじめのことを考えるならば、その学校が設置されている地域のことを指す場合もあるし、もっと広範囲の「全体社会」を指す場合もある。議論のコンテキストによってその指す範囲は変わってくる、と考えておくといいたいだろう。

おわりに

以上、いじめ現象を構成する7つのファクターについて論じてきた。これら諸ファクターすべてを念頭におくことによって、いじめに関する様々な議論の各々がいじめの発生・展開のどのレベルに強調点をおいた議論なのかを判別し、その議論に対して相応の位置づけを与えることができるだろう。また、例えば、いじめ加害者の内面ばかりに焦点を当ていじめをもつばら心理的現象として描いているかのような議論や、逆にいじめ発生の背景としてもつばらマクロな社会構造のことばかりを論じ、それをいじめ発生の原因として短絡させてしまっているような議論などに陥らず、いじめの発生・展開に関わる諸レベルについてバランスのとれた議論を組み立てることができるだろう⁶⁾。

注

- 1) 本稿は、勤務校の同僚や学生・院生とともに月に1回開催している、教育科学研究会の発行の月刊誌『教育』を読み検討する小さな研究会の、2007年7月28日の例会での筆者の報告とその後のディスカッションに基づいている。この日の例会では、『教育』2007年7月号の特集「『いじめ』を考える」の検討を行った。
- 2) 筆者は以前、この著書の書評文を書いたことがある（長谷川2002）。以下、この著書に触れる場合、そこで書いたことに基づいている。なお、最近内藤（2007）が出版された。それは、やや難解な内藤（2001）に対して、より入門的なものとして内藤自身によって位置づけられている著書である。

- 3) こうした意味での「定義」は、おおよそデュルケム（1895=1978）におけるそれを踏襲している。
- 4) 佐藤（2005）は、「差別行為とは、ある基準を持ち込むことによって、ある人（々）を同化するとともに、別のある人（々）を他者化し、見下す行為である」としている。「差別」というものをこのように捉えると、いじめは、それが差別行為の一種であることを重要な特徴のひとつとしていることが、クリアに浮かび上がってくるだろう。ただし厳密に考えれば、そこに「同化」「他者化」「見下し」が行われているかどうかは、直接観察可能なことがらではない（本文中では、ここでいう定義は観察可能なことがらからつくり出されるという趣旨のことを述べたが）。ある理論を前提にしてことがらを解釈したときにそういうものとして読みとれたり読みとれなかったりするというのが、本当のところであろう。
- 5) いじめの本質的性格をこのように把握する上で主に依拠したのは、赤坂（1986）のいじめ論である。赤坂（1986）も、本文で示したような、「供犠」としてのいじめという捉え方をしている。なお、長谷川（1998, 1999）ではそれ以外にも、菅野（1986）、内藤（1996）、照本（1995）、斉藤（1996）のいじめ論を検討し、各論におけるいじめの本質的性格把握をそれぞれ次のようなものと解釈した。
- 菅野（1986）： いじめとは、「汚穢のディスクール」を用いた「曖昧さの形而上学」のメカニズム（集団の秩序の同一性を、その秩序周縁に産出される曖昧なものとの差異によって構築しようとするメカニズム）に基づいて、社会秩序を産出しようとする「社会制作」の作業である。
- 内藤（1996）： いじめとは、〈欠如〉状態に陥った者たちが行う、「パワー」あるいは「完全なコントロール」を主題とするある特殊なタイプの「全能感筋書」を「具現」する共同的な行為である。
- 照本（1995）： いじめとは、日常的に「自己存在への不安」「自己否定への恐怖」を感じている者たちが、そうした不安・恐怖から逃れるために駆り立てられる、「水平暴力」としての「パワーゲーム」（＝「自分が下になって相手に従属するのか、逆に相手の上で立つて支配するのかを決定するための力の競い合い」）であり、それを通じての「弱者」の確定作業である。
- 斉藤（1996）： いじめとは、自分の力の欠損を感じている者が、自分以上に力を欠いているとみえる他者を攻撃することを通じて自分の力の確認をしようとする、心理的な行動である。
- 6) いじめ現象を構成する諸ファクターについて以上のような構図を描くに際して、筆者は、「被害者」の有する何らかの特性がいじめを発生させるという因果関係を、少なくとも重視はしていない。ただし、ある「心理状況」にある者にとっては、あるいはある「関係性の世界」のあり方の中では、ある特性を有する者が「攻撃誘発性」（竹川 1996）を帯びた者として立ち現れやすい、ということはあると思う。しかしその場合でも、いじめが進行するプロセスの中で、そのターゲットとなった者がある特性を帯びた者として（だからいじめてかまわない者として）構築されることがしばしばあるという点に注意しておく必要がある。

参考文献

- 赤坂憲雄（1986）『排除の現象学』洋泉社
- 斎藤学（1996）「学級の中のいじめといじめられ」堀尾輝久他編『講座学校4子どもの癒しと学校』柏書房
- 佐藤裕（2005）『差別論』明石書店
- 菅野盾樹（1986）『いじめ＝＜学級＞の人間学』新曜社
- デュルケム, E.（1895=1978）『社会学的方法の規準』岩波文庫
- 照本祥敬（1995）「『水平暴力』のもとでの『パワーゲーム』の対象化を —『いじめ』克服のための基本的視点として —」『生活指導』5月号

- 内藤朝雄（1996）『『いじめ』の社会関係論』鬼塚雄丞他編『ライブラリ相関社会科学 3 自由な社会の条件』
- 内藤朝雄（2001）『いじめの社会理論 その生態学的秩序の生成と解体』柏書房
- 内藤朝雄（2007）『〈いじめ学〉の時代』柏書房
- 長谷川裕（1996）「いじめという現象の性格把握のために — 『競争』及び『供犠』との関連で」沖縄生活指導研究会『民主的な子を育てるために』第 15 号
- 長谷川裕（1998）「いじめ論の状況 — いじめの本質的性格をめぐる議論を中心に — 」上・下『教育』1998 年 9・10 月号
- 長谷川裕（1999）「『いじめ』理論が明らかにしたもの — 『いじめ』の本質的性格をめぐつて — 」教育科学研究会編『「教育」別冊 10 いじめ自殺 6 つの事件と子ども・学校のいま』国土社
- 長谷川裕（2002）「本格的な『いじめ』理論 — いじめの心理構造と社会過程をつなぐ I P S 理論 — 」『生活指導』2002 年 3 月号
- 宮崎充治他（2007）「子ども・青年はいじめをどう見ているか — 中学生が中学生を描いた作品からいじめを読む — 」『教育』2007 年 7 月号
- 森田洋司他（1994）『新訂版 いじめ 教室の病い』金子書房（初版 1986 年）
- ルーマン, N. (1984 =1993,1995) 『社会システム理論 (上) (下)』恒星社厚生閣